

同志社大学
2017 年度卒業論文

多様化する「名づけ」についての研究
—3つの家族モデルの視点から—

社会学部社会学科

学籍番号:19141031

氏名:小木曾充浩

指導教員:立木茂雄

(本文の総文字数 20925 文字)

目次

1. はじめに	1
1.1 研究背景.....	1
1.2 先行研究	2
(1)「キラキラネーム」の由来.....	2
(2)名づけと世相.....	2
(3)名づけの歴史.....	3
(4)名づけのパターン.....	4
(5)家族制度の過程	5
(6)ナショナリズムとグローバル化.....	7
1.3 研究目的と意義.....	8
2. 方法.....	8
2.1 調査概要・対象.....	8
(1)調査対象.....	8
(2)キラキラネームの尺度化.....	9
(3)家族の得点化.....	10
(4)親の子に対する期待や希望の得点化.....	13
(5)質問項目	13
3. 結果.....	14
(1)キラキラネーム度の作成.....	14
(2)祖父母との同居との相関.....	15
(3)家族モデルとの相関.....	16
(4)教育方針との相関.....	18
4. 考察.....	21
5. 結論.....	23
6. 参考文献.....	25
URL	25

1. はじめに

1. 1 研究背景

今日、子どもの名前が読みにくいものが多くなっている。いわゆる「キラキラネーム」や「DQNネーム」と呼ばれる個性的な名前である。この「キラキラネーム」や「DQNネーム」と呼ばれる名前は、今の保育園、幼稚園、小学校などでは当たり前のように存在し、昔ながらの名前は「しわしわネーム」と呼ばれる始末である。インターネットやTV番組で変わった名前を取り上げ、「キラキラネーム」をつけた親が取材された際、個性的な名前をつけてマスメディアに取り上げられたといわんばかりの笑顔の親を見たことがある。私は、大事なわが子の名前をペット感覚でつけ、子どものことを全く考えていないことに不快感を覚えた。しかし、「キラキラネーム」などをつける親の気持ちも理解できる部分もある。それは子どもには個性的な存在であって欲しいという部分である。自分の子どもは特別であるのは理解できるが、名前という固有名詞に個性的さを求めるのは違うと感じる。そして、子どもには個性的な存在であって欲しいと思う気持ちが強すぎてマンガやアニメのキャラクターの名前をつけるなど子どもをオモチャのように扱うのは違うと考える。子どもの時は、「かわいい」などの理由で通用するが、大人になった時名前が奇抜なだけで偏見を持って見られてしまう可能性が高い。他にも奇抜な名前をつけられた子どもが小学校などでいじめられる可能性がある。実際、私が小学生の時に奇抜な名前の子が名前についていじめられていることを目撃したことがある。このようないじめなどの他人に傷つけられることがなくても、奇抜な名前をつけられることで大勢の前で名前を呼ばれることや、先生に褒められること、賞をもらうことが嫌になってしまうことがある。そしてそれが大人になった時に名前を教えたくないということになってしまう。自分の名前を名乗ることができないということは生活で大変不便である。そしてこのような「キラキラネーム」は、子どもの将来の不安の要因になっている。将来の不安の要因の1つとして挙げられるのは、就職活動である。有名な企業だと何倍、何十倍もの応募が殺到する。企業からしてみれば、何百、何千もの履歴書やエントリーシートを比較するのはとてつもなく大変な作業である。かつ誰もが自分に不利なことを書くわけがなく、同じような成功体験を書き、比較することが難しい。これによって、もし名前が読めないと判断されたならば、面接に進むこともできず書類選考で落とされてしまう可能性がある。このようなことがあるのは差別と感じるが、会社側からすると書類選考で大半を落とさないといけないことや仕事の時にお客様に迷惑をかけることや「ふざけた名前の人を雇っている」と会社のイメージが下がる可能性があるため落とすための正当な理由がある。就職活動以外にも人生において重要な結婚にも支障が発生する。結婚する際に、相手の家族から親への不信感や親せきなどに報告するのが恥ずかしいと感じる。子どもにペット感覚やオモチャのように扱ったために子どもの人生が台無しになってしまうのは大変不快に感じる。

子どもが傷ついている一方で、親も後悔することがある。名前を軽く考え、人に読めな

い名前や男女間違える名前が社会に迷惑をかけていると思っていなかったと後悔する親がいる。名前というのは一生背負っていかないと気付く人もいる。しかし、それはもう時すでに遅い。改名するには書類を出して終わりではなく、子どもの気持ちや自分の子を違う名前と呼ぶ違和感や苦痛、そして世間体が悪くなる。改名は簡単に行えるものではない。

このように奇抜な名前をつけることは、親子の問題だけではなく、社会に混乱や支障が起こっている。

1.2 先行研究

(1) 「キラキラネーム」の由来

「キラキラネーム」という名前の由来は2000年から存在する赤ちゃんの命名支援サイト「キラキラname」である。「キラキラネーム」はDQN（ドキュン）ネームの別称である。DQNネームとは、「DQNの親が子どもに付けそうな名前・DQNの親が子どもに付けた名前」を指している。「DQN」とは、インターネット用語で「常識を逸脱した人・非常識人」のことである。つまり「キラキラネーム」や「DQNネーム」とは、一般的に「常識を逸脱した人・非常識人」と否定的、批判的であるのが分かる。

(2) 名づけと世相

「名前は世相を反映」するとよく言われる。しかし、具体的にどのような名前が、どのような世相を表しているのかというのは案外わかりにくいものである。例えば、その年に活躍したタレントや著名人が名づけに影響するといわれるが、それは一時的なものであり、大きな時代のうねりを表しているものではない。そこで毎年、明治安田生命が発行している名前ランキングと時代背景を合わせて考察する。まずは、男性の名前に注目する。勝利、勇、武、勲、進など、戦いに関係する字を入れた名前が毎年のように男の子のベストテンに入っていた時期があります(牧野恭仁雄、2012)。これらの名前が人気であったのは、中国やアメリカと戦争を繰り返していた時代だったからである。日本と中国の戦争を振り返ると、1927年山東出兵、1928年張作霖暗殺、1931年満州事変、1932年上海事変、そして1937年盧溝橋事件で日中戦争が起きた。このころ本格的な長期戦を迎えるに当たり、戦いに関係する名前が少しずつ増えはじめました(牧野、2012)。このことから戦争をきっかけに名づけが変化していることが分かる。そして、終戦までのことを振り返ると、1941年真珠湾攻撃、1942年ミッドウェー海戦、1943年ガダルカナルの戦い、1944年インパール作戦、そして1945年東京大空襲および広島・長崎の原爆投下である。1937年の日中開戦以降の盛りあがりのときよりも、太平洋戦争が終わる1945年に近づくほど、上位のほうに色濃くあらわれているのです(牧野、2012)。このことから考えられるのは、日中戦争で無敵と思っていた日本がだんだん敗戦を重ねることによって勝利の見通しが立たなくなり、自信を失っているほど勝利に関連する名前が増加している。名前は世相そのものをあらわすのではなく、日本人の欠乏感をあらわしているのです(牧野、2012)。つまり、

名づけというのは、時代の雰囲気そのままあらかわすだけではなく、反比例するように名づけが増加することもある。

そして、終戦後の名前には、茂、実、稔、豊など収穫を表すような名前が男の子に盛んにつけられている。この時代背景には、日本の食料不足があった。日本人の多くが、何とかその日その日の食べ物の心配をせずに暮らせるようになったのは、昭和30年代のなかばあたりからです(牧野、2012)。今の現代は、飽食の時代であるため大量の収穫の願いを込めた名前がない。次に女性の名前に注目すると、昭和時代の女性は「幸子」という名前が多い。この「幸子」が多い時代背景には、女性は人生、進路、結婚相手などほとんど自分で決定することができない時代であった。家事や農作業を一生続けなければならなかった。非道徳的な行為など村八分になりかねず、節操、貞節が女性に強く要求された時代でもありました(牧野、2012)。このことから女性にとって大変生きづらい時代であり、節度が今の現代よりはるかに必要であったため「幸」や「節」をつける親が多かった。昭和30年代では、多くの家庭に「三種の神器」と呼ばれる家電製品などが普及しはじめ、主婦の負担が減り、「幸」が多くつく時の時代と比較して自分に使える時間が増え、次第に「幸」とつく名前が減少した。そして「幸」のついた名前は、高度経済成長を象徴する大阪万博が開催された1970年にベストテンから姿を消した。また、大正から昭和初期のあたりには「久」や「千代」という名前が多い。この名前の意味には、「末永く」という願いが込められている。この時代背景には、医者やいない村が全国にたくさんあり、健康保険の制度や予防接種などもなく、そして貧しくて病院にもいけないことが多かった。そのため名前には、長寿で長生きしてほしいという日本人の欠乏感があらわれている。つまり名前にあらわれる世相とは、その時代に強く求められながらも、手に入り難いものを指している。他にも、バブルの時には、日本中が仕事人間になってお金や地位に人生の比重が置かれるようになった。このことによって、「家族のコミュニケーション不足」が人に愛されたいという欠乏感につながっている。

現代における名づけは、動物や植物、季節、海、空、天体など大自然をあらわす字がよく使われている。このことからわかるのは、様々な場所で都市化が進むことによって、都市部に住む人にとって、大自然のなかに入り込むのに時間とお金がかかる時代背景がある。

(3)名づけの歴史

どの社会においても、例外なく、人は本名を持ち、他人に名を授ける。つまりこれは自然の領域に属する。そして、どのような意味の名前をつけるか、命名者は誰かなど、社会ごとに異なる。しかし、ランダムにあるいはでたらめに名づけをするのではなく、そこには規則がある。規則には、同時に、普遍性という性質を持っている。また、日本人の名前は、倫理的な意味や徳目的な概念、あるいは伝統的な美感を親の願いや期待を込めて表現されることが特徴であった。たとえば、戦後間もない時は男子の名前は、「博」「進」「清」「修」「正」など、女子の名前は「和子」「幸子」「節子」「美代子」などが上位にあ

がる。文字の使い方そのものを多様化させることで親が望ましいと考える現代風の名前や、より個性的な名前になる一方で、社会的機能という面では多少不便な名前が出現している（佐藤稔、2007）。このことから現代の名づけ行動は、社会的規則を破った個性を重視するような傾向がある。そして、現代の親は個性を重視するばかりに普通の人知らないような漢字をやみくもに使うようになった。つまり、親が将来子どもの抱えるリスクなどを考えずに無責任に名づけをしている。このように名づけの社会的慣習からもとづく規則を破っている「キラキラネーム」は否定的である。またアニメのキャラクターに漢字を当てはめたりすることなど意味不明な名前は子どもに良い期待を与えない。たとえば、小学生のときに親に名前の由来を聞く機会があったが、本来は、生まれる前から親が子どものことをどれほど想ってわが子に会うのを待ちかねていたことが伝わるものである。すなわち親子の絆が深まり、喜びをもたらす経験だと考えられる。しかし、「キラキラネーム」をつけられた子どもは、それが喜びの経験ではなく、むしろ自分の親を疑問に思う経験になり兼ねない。そして周りの人は、「キラキラネーム」をつけられた人に対して同情を見せることがあるが、同時に軽い「ネタ」として評価することが多い。本来ならば、名前に込められた想いを尊重されるべきであるがそれを否定されてしまう。このように子どもが将来恥ずかしいという個人的な感覚と、就職活動において面接などで損する可能性が高いため否定的である。

(4)名づけのパターン

名づけのパターンから考察する。名前の付け方には大きく分けて6つほどある（倉石あつ子、2000）。①生まれた子が将来偉い人、尊敬される人になるよう神主、僧侶、村の有力者に名づけを頼む。②いくつかの名前の中から神意によって決定する。③子沢山で丈夫な子を育てあげている人に名づけを頼む。④祖父母の名前の1字をもらう。⑤生まれてきたときの状態で名前をつける、あるいは⑥子沢山でもう子どもはいらないという場合につける独特の名前をつける。昭和初期に民俗学で名づけの関心が高まった時はこのように名づけを分類した。名前を付けることによって、生児は安定したこの世の人となり、社会的に認められた（倉石、2000）。家の神棚などに命名書を貼り、七夜の祝いの席で、人々に披露することによって社会的に認められた（倉石、2000）。このことから名づけというのは、社会的に認められるために必要な儀式であることが分かる。その後の社会において名づけのパターンは5つに区分できる。第1は、誕生を記念してつける。たとえば、生まれた月日、季節、土地、社会的事件に因んだ名などである。第2に、音声・文字の条件から、ひびきのいい名などである。第3に意味から考える。たとえば、親の願いを込めた名前や故事成句からの名である。第4に人にあやかるため、人にあやかる名、親族名からとった名である。第5に、兄弟の順序から、呼び名系統の名、他の方法で順序を示した名である。この名づけのパターンで3つのことがわかる。1つは、出生の事実そのものを表したものである。これは生まれた月日、季節などに因んだ名づけのパターンである。2つ目

は、出生という客観的事実ではなく、子に対する願望について表したものである。これは、親の願いを込めた名前や故事成句からの名である。最後に出生の事実について、また出生した子に対する願望でもなく、ただある種の意味の表現によるものである。これは、兄弟の順序で決める、呼び名系統の名である。「キラキラネーム」が流行したのは、親の願望が多様化したのが原因であると考えられる。期待や願望や決意を込めた命名は、期待や願望や決意の内容を他へも宣言するとともにみずからに言い聞かせるという意味で「名のり」となり、事物が複雑多様となった近現代社会においては、名のりの命名が主流になりつつある（田中宣一、2001）。

「キラキラネーム」ができた原因の1つは、音から決めるタイプの名づけである。たとえば、外国人のような名前に漢字を当てはめることである。音から決めることによって読めない名前が増加した。また読みにくい名前が増加した一因として、名のり字からの逸脱である（佐藤、2007）。名のり字は、字訓の拡張という日常漢字の用法からの逸脱に対して、このごろの人名漢字の用法は名のり字の枠から逸脱している（佐藤、2007）。これは、日本人の人名には読み方に制限が設けられていないため、恣意的な読みができてしまうというのが原因であると考えられる。また、現代社会では親の願望や決意の多様化や個人主義化にともなって日本人の人名に制限がないことで「キラキラネーム」が発生してしたと言える。

(5) 家族制度の過程

今日の家族は「直系制家族」から「夫婦制家族」、そして「夫婦制家族」から「合意制家族」という家族変動が生じている。「直系制家族」は、明治政府が中央集権国家を企て、近代国家の形成のため、各地のさまざまな相続制度を当時としては10%ほどの割合を占めるにすぎなかった武家に支配的であった父系優先の長男単独相続制の家族慣行を基礎にした「家」制度である。直系家族制としての「家」制度で最も重要な側面は、戸主権の存在と、相続における長男と次三男以下とのあいだの明確な差別である（野々山久也、2007）。この「家」制度によって、日本の初期工業化にとって、その発展の内在的な必要条件の整備に貢献した。長男1人に資産を相続させ、資本の蓄積や投資を可能にすると同時に、次三男以下の滅私奉公的な貢献によって、日本の国家や企業は、徐々に資本の蓄積を可能にしていった。

戦後改革は、民法の改正と戸籍制度の改正による「家」制度、つまり直系家族制の廃止であった。このことによって、制度としての家族という点での民主化や近代化が法的に確立した。しかし、次三男以下の排出する単独相続慣行の持続や老親の単独扶養慣行や婚姻後の夫方名字への同姓化慣行など、従来の直系制は、戦後も継続していった。それと同時に、都市における給与生活者の家族においては「家」制度の廃止がそれまでの家族生活にそれほど影響もなく、むしろ法改正による夫婦家族制への移行が時代の必然として容易に受け止められていった（野々山、2007）。つまり、戦後の法改正によって意識が変わった

のではなく、工業化とともに戦前にすでに都市を中心にして実質化しつつあった夫婦単位の家族構造が正当化されたに過ぎない。そして高度工業化の進展に促されて、次三男以下だけではなく、長男夫婦も都市に働きに出ることによって核家族形態の世帯が増加した。そこにはもはやかつてのような法的に規定された家族統制のための戸主権や家督相続権は存在していない。「夫婦制家族」では、それまで営んできた親のレベルとは異なって少しでも生活レベルを上昇させたいとする「家族生活の向上動機」にもとづく個別の実践が展開していた。集団としての家族による自己組織化にもとづく個別の実践、すなわち職住分離にもとづく性別役割分業化が展開していた。

新たな職住分離による性別役割分業の規範性が成立することになった一方で、高度工業化の最終段階では、そうした規範性を利用しながら、第2次産業を中心に第3次産業の拡大の中でGDP世界第2位に至り、豊かな生活の実現、すなわち家族生活の向上を達成していった。この産業構造の転換が起こったことにより、日本の工業化は、金融や流通、医療、教育、福祉、情報、スポーツ、レジャーなどのサービス産業の拡大や新たな知識産業化の進展による「脱工業化ないし高度情報化」という新たな段階に入ってきている（野々山、2007）。この第3次産業の拡大によって、「夫婦制家族」とは矛盾するような女性労働者への依存、ことに既婚女性の就労化への依存を前提にしていた。それは高度工業化の段階のような夫婦制の家族規範を前提にしたパート就労中心の依存ではなく、ある程度の高度な専門的能力や女性固有の能力を重視した既婚の女性の就労化への依存へと発展してきている。これに呼応して女性の高学歴化の進展も著しい。高学歴化した理由は、「社会の平等化」が生じているからにはほかならない（野々山、2007）。男子だけでなく女子も含んで、兄弟姉妹間にほとんど差別のない教育投資が行われるようになってきている。そしてそれは少子化の影響も大きい。既婚女性の就労化は、妻たちの経済的自立の可能性を高め、夫への依存性や従属性を減少させることになる。また、夫と同じようにキャリア志向となれば、従来の性別役割分業は成立しなくなり、夫婦相互の日々の時間調節や人生設計の調整が必要不可欠である。これによって、個人にとって1つのライフスタイルと認識されるようになる。後期工業化の段階では、人々の家族生活における志向は、「夫婦制家族」の時の「家族生活の向上動機」から「家族生活の選好動機」へと変化していくことになる。これはライフスタイルにおける変化や経済的自立の可能性を通して、女性たちもそれまで家族システムに端から拘束されていたライフスタイルから自由になり、自らのライフコースを選択できる可能性がでてきた。それは結婚する時の選好にも関係する。男性にとっても女性にとっても、従来からの年齢規範や性別規範は、希薄していくことになる。選好動機にもとづけば、晩婚化することもあれば、早く結婚することになる。すなわち婚期分散化（結婚ライフスタイルの多様化）である。結婚ライフスタイルもその1つの下位概念としての位置にある上位概念としての「ライフスタイル」については、暫定的には一応、「家族生活に関わる生活諸関係ならびに生活諸資源に対する個人あるいは家族成員の自主的な選択行動のパターン」という定義を与えておくことにする（野々山、2007）。家族ライフ

スタイルは、かつてのように制度や規範や理念などによってあらかじめ規定されてしまっているのではない。むしろ成員の間での合意にもとづく任意的選択、それも経験の積み重ねという展開のなかで、時間的経過とともに常に変化する可能性のある選択としての家族行動パターンである。家族生活が個人にとって1つのライフスタイルとして認識されるようになるには、既婚女性の就労化によって妻たちの個人化、つまり家族集団埋没的な人生からの対自的自己追求にもとづく離脱を筆頭にして、さらに多くの理由が存在している。また平均寿命が延びていることによって、遺産相続の在り方も財産の個人化とともに相続相手が任意的に選択されているため多様化してきている。それは老後の家族ライフスタイルの多様化に他ならない。

(6) ナショナリズムとグローバル化

次にナショナリズムとグローバル化、個人化社会から名づけについて考察する。まずナショナリズムでは、宗教共同体と王国が社会の組織化のための役割が衰退したため生じたものである。この新しい想像の国民共同体を可能にしたものは3つの相互作用である。1つは、資本主義の生産システムと生産関係である。また印刷・出版によるコミュニケーションの発達である。そして最後に、人間の言語的多様性という宿命性である。国民国家は、組織内部での交流を通じて、成員の間に共通の時間、空間の認識が生み出され、同時に同朋としての意識を共有するに至った。国民という言葉には自己犠牲を伴う愛情を喚起する。名づけにおいて社会的規則を守る部分や倫理的な意味や徳目的な概念、あるいは伝統的な美感を親の願いや期待を込めて表現されることに関連している。つまり、日本人の伝統や文化を継承している。

次に個人化社会になった原因は、初期の近代の幻想の崩壊と衰退である。幻想とは、公正な社会や何らかの形でイメージされた良き社会、闘争なき社会である。また社会の財産・資産と見なされていたものが断片化されたことによって「個人化」が生じた。そして個人の自己主張のほうに決定的に移行した。つまり、他者と異なっても良く、思うままに幸福や好ましいライフスタイルについての自分たち自身のモデルを選び好みできるようになった。これによって公共空間が小さくなることで私的トラブルが増加した。またアイデンティティは、「所与」から「課題」に変化した。自分が選択できるようになった。これはグローバル化の圧力と個人化の圧力の連携およびそれらが生じさせる緊張の副次的作用であり副産物である。これによって「キラキラネーム」が出現したのは、公共性の喪失と関係していることが分かる。これは「家」制度の崩壊の時に生じた継承することが減少したことである。そして日本の名づけの社会的規則を破って子どもにオンリーワンの名前をつけるようになったと考えられる。

1.3 研究目的と意義

「名づけ」というものは、親が子どもに対して初めてあげる重要な贈り物であると考えられる。そして、名前というものは、一生背負っていくものである。それを無責任にペット感覚で考え、子どもをオモチャのように扱うのはあってはならないと感じる。子どもにとって親から命名されるということより親がどのような気持ちでつけてくれたかという部分が重要である。しかし、今日では、「キラキラネーム」と感じる名前が将来当たり前のようになっていき、奇抜と感ずることがなくなるのかもしれない。

先行研究を通して、名づけは、時代背景によって日本人の欠乏感が要因となっていることが分かった。つまり、今日の名づけは、親の子に対する希望や期待が多様化しているのは、様々な欠乏感があることが要因であると考えられる。しかし、欠乏感以外にも漢字の意味を考えず、漢字を音に当てはめることによって名づけのパターンを無視している場合がある。家族の変化では、「直系制家族」から「夫婦制家族」そして「合意制家族」へと変化することによって、家族の在り方というのは多様化している。一方で、家族の多様化によって祖父母と同居することが減少していることが名づけの歴史が継承されていないかは先行研究からはわからなかった。また、家族の多様化が名づけに関連しているかもわからなかった。そして最後に親の子に対する期待や希望が多様化しているという点においてどのような期待や希望をもって子どもに命名しているかは記してはいなかった。

そこで本稿では、「名づけ」と「家族」を中心に3つのことを研究していく。1つ目は、祖父母の同居していることによって、「名づけ」の伝統は継承されているのかという点。2つ目は、家族の在り方、つまり、「直系家族」、「夫婦制家族」、「合意制家族」の違いから「名づけ」がどのような違いがあるかという点。3つ目は、親の子に対する期待や希望がどのような期待や希望があるかという点。この3つを調査することによって、現代の「名づけ」を明らかにしていきたいと考える。

2. 方法

2.1 調査概要・対象

(1) 調査対象

本研究の調査対象は、今後結婚して子どもに名づけを行う可能性が高い大学生である。この調査は、質問紙調査であり、2017年11月14日(火)に、立木教授が開講している家族社会学の時間を頂戴して質問紙を配布した。また協同制作した同じゼミに所属している弘津凌希とともにサークルやバイトの学生に質問紙を配布した。調査全体の回収数は、72枚であり、回答の不備や日本の名づけや家族に調査をしたいため外国出身者を除外した有効回答は69人であった。なお、調査票の表紙には、調査の趣旨・得られたデータの使用目的、回答から個人が特定されることや個人情報漏洩することはないということを明記した。得られた回答はすべて、統計ソフト SPSS Ver. 25 を用い数値化し分析を行った。

(2)キラキラネームの尺度化

キラキラネームを測定するために変数化をした。倉石が作成した名づけのパターン①生まれた子が将来偉い人、尊敬される人になるよう神主、僧侶、村の有力者に名づけを頼む、②いくつかの名前の中から神意によって決定する、③子沢山で丈夫な子を育てあげている人に名づけを頼む、④祖父母の名前の1字をもらう、⑤生まれてきたときの状態で名前をつける、あるいは⑥子沢山でもう子どもはいらないという場合につける独特の名前をつけるといった6パターンや牧野が分類した17種類のキラキラネーム分類(①間違っただ読み方の名、②読み方は間違いではないがあまりに珍奇な名、③外国の言葉を無理やり漢字にする名、④意味と読みを混同し間違っただ読み方にする名、⑤あだ名のように思われやすい名、⑥おかしい連想につながることや読み方を変えてあだ名にされやすい名、⑦いかにも古風な響き名、⑧おかしい意味になる名、⑨熟語になるためおかしく見える名、⑩呼び名が時代が男女両方にあり区別がしにくい名、⑪読み方が男女に分かれ男女ともにつけられる名、⑫文字が女性の字で響きが男性の名、⑬普通の名前なのに読み方を変えて珍奇になった名、⑭むつかしくて説明のしにくい名、⑮日本語あるいは古語で特別な言葉にも聞こえる名、⑯古来、別の使われ方をした名、⑰外国語でおかしい連想をおこす名)、明治安田生命の名前ランキング、赤ちゃん本舗の名前ランキング、赤ちゃん名づけというインターネットのサイトの名前ランキングを参考した。これらを参考にして表1を作成した。

	キラキラネーム	普通の名前
読みやすい	朝陽(あさひ) 結愛(ゆあ) 結月(ゆづき) 湊(みなと) 陽菜(ひな) 颯太(そうた) 美桜(みお) 美月(みづき) 一花(いちか) 理人(あおと) 蒼空(そら) 大和(やまと) 紗菜(さな) 心春(こはる) 永恋(えれん) 海斗(かいと) 大雅(たいが) 琉斗(りゅうと) 優心(ゆうしん) 心愛(こあ) 心美(こみ) 心菜(こな) くるみ 湊斗(えいと) 美羽(みう) 新(あらた) 琉生(るい) 結人(ゆいと) 奏多(あなた) 凜(はやて) 乃愛(のあ) 一心(いっしん)	茂雄(しげお) 誠(まこと) 隆(たかし) 修(おさむ) 博(ひろし) 進(すすむ) 清(きよし) 正(ただし) 豊(ゆたか) 恵子(けいこ) 洋子(ようこ) 幸子(さちこ) 京子(きょうこ) 和子(かずこ) 由美子(ゆみこ) 美智子(みちこ) 久美子(くみこ) 悦子(えつこ) 順子(じゅんこ) 拓也(たくや) 健太(けんた) 翔太(しょうた) 翼(つばさ) 大貴(だいき) 翔(しょう) 亮太(りょうた) 拓哉(たくや) 雄大(ゆうだい) 美咲(みさき) 愛(あい) 遥(はるか) 佳奈(かな) 舞(まい) 葵(あおい) 彩(あや) 菜摘(なつみ) 穂子(ももこ) 茜(あかね) 蓮(れん) 大輝(だいき) 陸(りく) 悠希(ゆうき) さくら 結衣(ゆい) 学(まなぶ) 昌代(まさよ) 竜太(りゅうた) 史章(ふみあき) 幸造(こうぞう)
読みにくい	騎士(ないと) 碧空(みらん) 輝星(だいや) 陽空(はるく) 心人(はーと) 皇帝(しいざあ) 星康(きらり) 奏夢(りずむ) 妃(ひな) 希星(きてい) 貴熊(ぶう) 七音(どれみ) 一心(びゅあ) 優杏(ゆず) 唯愛(いちか) 桃花(びんく)	咲良(さくら) 悠翔(ゆうと) 陽向(ひなた) 結菜(ゆうな) 大翔(ひろと) 樹(いつき) 公亮(こうすけ) 偉人(たけひと) 陽翔(はると) 湊介(そうすけ) 姫人(はやと) 陽輝(はるき) 美空(みく) 虎太郎(こたろう) 優翔(ゆうと) 健(たける) 和奏(わかかな) 翔琉(かける) 柊(しゅう) 一翔(かずと) 碧(あおい) 愛菜(まな) 葉奈(かんな) 久高(ひさたか) 眞規雄(まきお)

表1.名前の分類

表1は、まずキラキラネームと普通の名前に区別した。そして、キラキラネームと普通の名前を読みやすいものと読みにくいものとに区別した。この表を使い、質問項目を作成した。それが下記のものになる。

普通の名前(読みやすい)：普通の名前(読みにくい)
 茂雄(しげお)：眞規雄(まきお)
 昌代(まさよ)：咲良(さくら)
 普通の名前(読みやすい)：キラキラネーム(読みやすい)
 学(まなぶ)：湊(みなと)
 愛(あい)：乃愛(のあ)
 普通の名前(読みやすい)：キラキラネーム(読みにくい)
 竜太(りゅうた)：輝星(だいや)
 洋子(ようこ)：奏夢(りずむ)
 キラキラネーム(読みにくい)：キラキラネーム(読みやすい)
 碧空(みらん)：朝陽(あさひ)
 結愛(ゆあ)：妃(ひな)
 キラキラネーム(読みにくい)：普通の名前(読みにくい)
 心人(はーと)：虎太郎(こたろう)
 希星(きてい)：愛菜(まな)
 キラキラネーム(読みやすい)：普通の名前(読みにくい)
 琉斗(りゅうと)：悠翔(ゆうと)
 心愛(ここあ)：栞奈(かんな)

表2.名づけに関する質問項目

表2は、表1を使い、6つのペアを組みかつ男女の名前に分け、合計12個の質問項目を作成したものである。6つのペアの内訳は、普通の名前(読みやすい)：普通の名前(読みにくい)、普通の名前(読みやすい)：キラキラネーム(読みやすい)、普通の名前(読みやすい)：キラキラネーム(読みにくい)、キラキラネーム(読みにくい)：キラキラネーム(読みやすい)、キラキラネーム(読みにくい)：普通の名前(読みにくい)、キラキラネーム(読みやすい)：普通の名前(読みにくい)である。そして、質問項目ではあなたに子どもができた時に名づきたい名前にどちらか一方に○をつけてもらうことにした。

(3)家族の得点化

家族の得点化において、野々山久也の『現代家族のパラダイム革新』(2007)で述べている「直系制家族」、「夫婦制家族」、「合意制家族」の3つのモデルのうちどのモデル傾向を示すのかを測る質問項目を36項目(直系制家族:10項目、夫婦制家族:10項目、合意制家族:16項目)を作成した。この36の質問項目は、野々山の同著書の中での3つのモデルの特徴を示した部分から引用した文章と、高橋理(2015)の質問項目を参照して弘津と協同制作した。本研究では、「自身の出身家族モデル」を計測したいため「理想の結婚相手の出身家族モデル」は家族得点から除外した18項目(直系制家族:5項目、夫婦制家族:5項目、合意制家族:8項目)を得点化した。リード文は、「以下は「家族意識」に関する質問です。あなたの家族の考え方に近いものを選択して、○をつけてください」とし、「あなたの家族の考え方」の部分強調するため太字にした。そして、以下では、3つの家族モデルの得点化を示した。

	あてはまる	どちらかといえ ばあてはまる	どちらかといえ ばあてはまらない	あてはま らない
長男は結婚をした後、両親と同居するべきだと考えている。	1	2	3	4
家庭内において、長男は次男以下よりも優位に立つべきであると考えている。	1	2	3	4
長男は結婚後も親と同居し、世帯を世代的に継続させるべきである	1	2	3	4
父親が家族を統率する権利を持つべきだと考えている	1	2	3	4
結婚時において姓は夫側の姓を選択したいと考えている	1	2	3	4

表3.直系制家族得点

表3は、直系制家族の質問項目で尺度化した。1を「あてはまる」、2を「どちらかといえばあてはまる」、3を「どちらかといえばあてはまらない」、4を「あてはまらない」で回答してもらった。そして、この5つの質問項目の足し合わせたものを「直系制家族得点」とした。また点数を逆転させることで「直系制家族得点」が高いほど直系制家族モデル傾向が強いと分析した。

	あてはまる	どちらかといえ ばあてはまる	どちらかといえ ばあてはまらない	あてはま らない
夫は家庭外就労をして家庭の経済的支えとなり、妻は家庭で家事や育児をすることは当然である	1	2	3	4
家庭内で子供の世話を中心的にするのは母親であると考えている	1	2	3	4
結婚後は個人のライフスタイルを優先するよりも、家族としてのまとまりを優先するべきである	1	2	3	4
結婚をするということは、結婚相手と人生を共有し、一生、一心同体になることであるとする	1	2	3	4
妻は夫の家系を継続させるために子どもを産むものであるとする	1	2	3	4

表4.夫婦制家族得点

表4は、夫婦制家族の質問項目で尺度化した。表3同様、1を「あてはまる」、2を「どちらかといえばあてはまる」、3を「どちらかといえばあてはまらない」、4を「あてはまらない」とした。この5つの質問項目を足し合わせたものを「夫婦制家族得点」とした。ま

た、点数を逆転させることによって「夫婦制家族得点」が高いと夫婦制家族モデルの傾向が強いと分析した。

	あてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらかといえばあてはまらない	あてはまらない
家族の形は決まりきった型に当てはめる必要はないと考える	1	2	3	4
限りある人生を家事や育児よりも趣味のために使いたい	1	2	3	4
結婚するのに適正年齢はないと考える	1	2	3	4
親と子供だけで構成される核家族形態にこだわる必要はないと考える	1	2	3	4
生涯において結婚をする必要はないと考える	1	2	3	4
結婚後は男性の姓に合わせるのが適正であると考え	1	2	3	4
夫は家庭外就労、妻は家庭内で家事や育児という役割にとらわれる必要はないと考える	1	2	3	4
必ずしも男性が家を支える大黒柱でなくてもいいと考える	1	2	3	4

表5.合意制家族得点

表5では、合意制家族の質問項目8つである。これも表3、表4と同様に1を「あてはまる」、2を「どちらかというにあてはまる」、3を「どちらかといえばあてはまらない」、4を「あてはまらない」とした。この8つの質問項目を足し合わせたものを「合意制家族得点」とした。また、質問項目の「結婚後は男性の姓に合わせるのが適正であると考え」は、逆転項目として入れている。この項目以外の点数を逆転させて得点が高いほど合意制家族モデルの傾向が高いと分析した。

(4)親の子に対する期待や希望の得点化

- 01 礼儀作法がよいこと
- 02 成功しようと努力すること
- 03 正直なこと
- 04 身だしなみがよく清潔なこと
- 05 良識があり健全な判断ができること
- 06 自制心のあること
- 07 男らしくまたは女らしくふるまうこと
- 08 他の人と強調できること
- 09 両親のいうことをよく聞くこと
- 10 責任感のあること
- 11 他人に思いやりのあること
- 12 ものごとがどのようにそしてなぜ起こるかに興味をもつこと
- 13 よい生徒（よい職業人）であること

表6.親の子に対する希望や期待尺度

表 6 は、親の子に対する期待や希望を得点化するにあたって、1985 年の『社会階層と社会移動調査(SSM 調査)』の B 票にある「教育するにあたって重要なこと」を引用した。SSM 調査とは、1955 年から 10 年ごとに行われている社会調査である。調査内容は、職業、職歴、教育、家族、社会に関する意見などである。またこの調査によって、親の職業と子どもの職業の結びつきや教育と職業の結びつき、職業と意見との関係などが明らかにされてきた。この調査を引用することによって、親の子に対する期待や希望が具体的に明確化できると考える。SSM 調査では教育する際に聞かれているが、本研究では、自分に子どもができたと仮定してどのような子どもになって欲しいかということに回答してもらった。そして、この 13 の特質のうち重要であると考えられるもの 3 つに○をつけて回答してもらった。この重要なこと 3 つの中で最も重要なこと 1 つにも○をつけて回答してもらった。しかし、本来 SSM 調査は、社会階層や階層移動があるかの調査であるが、本研究では、将来結婚して子どもに名づけるであろう大学生を調査対象にしているため同じ階層の人が多くなっているのは考慮が必要である。

(5)質問項目

問 1 では、表 3 の「直系制家族得点」5 項目、表 4 の「夫婦制家族得点」5 項目、表 5 の「合意制家族得点」8 項目の計 18 項目を回答してもらった。問 2 では、「理想の結婚相手の出身家族モデル」の計 18 項目である。問 3 では、表 2 の「キラキラネーム尺度」の計 12 項目である。問 4 では、表 6 の「親の子に対する期待や希望」を 13 の特質から 3 つ

重要なことを回答してもらい、加えて3つのうちから最も重要なこと1つを回答してもらった。問5～問7は、調査票を協同制作した弘津の「結婚に関する意識」についての質問項目である。問8以降は、フェイス項目である。フェイス項目は、「性別」、「年齢」、「中学3年生の時に過ごしていた都道府県または国」、「所属している学部・学科」、「現在、同居している家族の人数」、「実家で祖父母と同居しているか」である。この質問項目を使い以下では、調査結果を示す。

3. 結果

(1) キラキラネーム度の作成

まず、表2で示した「キラキラネーム尺度」の数値を最適尺度法を用いて分析した。最適尺度法とは、数量化した数量を各変数のカテゴリーに割り当てることである。これにより、標準手続きを使用して、数量化された変数について解を求めることができる。交互最小二乗法と呼ばれる反復法を使用して、各尺度変数の最適な数量化が実行される。

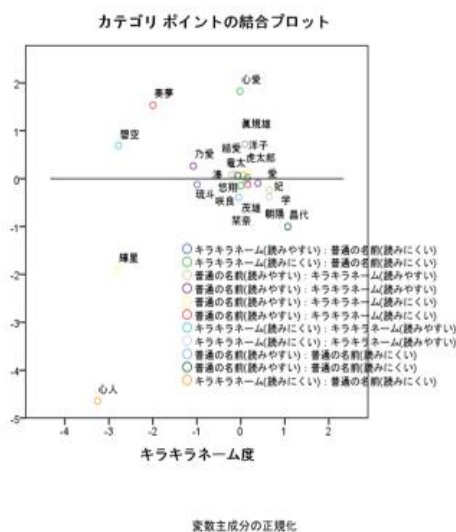
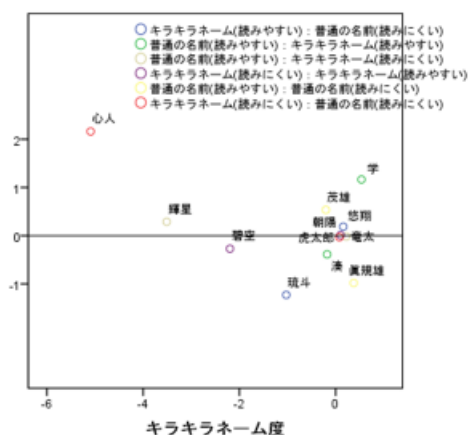


図1.男女の名前を含めた最適尺度法

図1では、表2の男女の名前を含めたものを使用し、最適尺度法を用いた分析結果である。この結果から分かったことは、横軸は値が正の値にいけばいくほど表1の普通の名前(読みやすい)にあてはまり、負の値にいけばいくほどキラキラネーム(読みにくい)に当てはまった。そこで横軸の名前を「キラキラネーム度」とした。一方で縦軸を考察したが、相関関係を見つけることができなかつたため縦軸を使用していない。男女の違いを見つけることができなかつたため、以下の表で男女別にしたものを記載した。

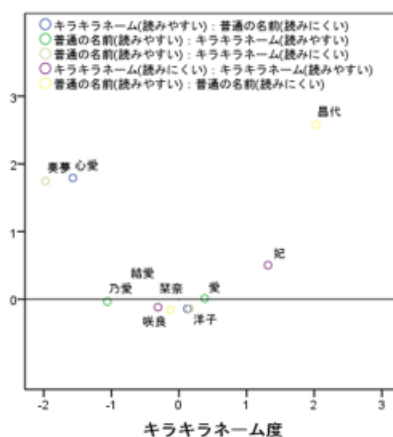
カテゴリ ポイントの結合プロット



変数主成分の正規化

図2.男の名前だけの最適尺度法

カテゴリ ポイントの結合プロット



変数主成分の正規化

図3.女の名前だけの最適尺度法

図 2、図 3 は、男女別に最適尺度法を用いて分析した結果である。図 1 と同じく、どちらも横軸の正の値は、普通の名前(読みやすい)であり、負の値は、キラキラネーム(読みにくい)である。また、縦軸の相関を見つけることはできなかったため縦軸を使用していない。この図 1、図 2、図 3 を用いて分析していく。

(2) 祖父母との同居との相関

第 1 章の研究目的と意義で記載した「祖父母と同居していることによって、名づけの伝統を継承しているか」を分析する。これを分析するために上記の図 1、図 2、図 3 の最適尺度法の分析結果と質問項目の「実家では祖父母と同居している」を独立したサンプルの t 検定を用いた。独立したサンプルの t 検定は、2 つのサンプル(標本)間の平均

の差を検定する。

			t 値	自由度	有意確率 (両側)	
男女の名前を含めたキラキラネーム度	等分散を仮定しない	祖父母有り	12	-1.767	39.987	0.085
女の名前だけのキラキラネーム度	等分散を仮定しない	祖父母有り	12	-0.435	21.031	0.668
男の名前だけキラキラネーム度	等分散を仮定しない	祖父母有り	12	-2.452	64.120	0.017

N=69, **:p<.01, *:p<05

表7.キラキラネーム度と祖父母と同居の独立したt検定

表7は、図1、図2、図3で示した「男女の名前を含めたキラキラネーム度」、「男の名前だけのキラキラネーム度」、「女の名前だけのキラキラネーム度」を「実家で祖父母と同居しているか」を独立したサンプルのt検定を行ったものである。この分析結果から祖父母と同居している人は、普通の名前をつける人が多いと解釈することができる(男女の名前を含めたキラキラネーム度のt値=-1.767 自由度=39.987 有意確率=0.085、女の名前だけのキラキラネーム度のt値=-0.435 自由度=21.031 有意確率=0.668、男の名前だけのキラキラネーム度t値=-2.452 自由度=64.120 有意確率=0.017)。しかし、女の名前だけのキラキラネーム度は、有意確率が10%を超えているためこの結果には考慮が必要である。

(3)家族モデルとの相関

次に、表3、表4、表5で示したように3つの家族モデル「直系制家族」、「夫婦制家族」、「合意制家族」を得点化したものを図1、図2、図3の「キラキラネーム度」を独立したサンプルのt検定を行った。

	直系家族得点5項目	夫婦制家族得点	合意制家族得点
男女の名前を含めたキラキラネーム度	0.094	0.168	-0.188
有意確率(両側)	0.441	0.168	0.122
男の名前だけのキラキラネーム度	0.093	0.117	-0.175
有意確率(両側)	0.446	0.338	0.151
女の名前だけキラキラネーム度	-0.008	0.155	-0.123
有意確率(両側)	0.949	0.203	0.314

N=69, **:p<.01, *:p<05

表8.3つの家族モデル得点とキラキラネーム度の独立したサンプルのt検定

表8は、3つの家族モデル得点とキラキラネーム度の独立したサンプルのt検定の分析結果である。この結果から、直系家族得点が高い人とキラキラネーム度は、相関が見つかる

ことができなかつた(男女の名前を含めたキラキラネーム度 t 値=0.094 有意確率=0.041、
 男の名前だけのキラキラネーム度 t 値=0.093 有意確率=0.446、女の名前だけのキラキラネーム度=-0.008)。
 夫婦制家族得点が高い人は、普通の名前をつける人が多いと解釈できる
 (男女の名前を含めたキラキラネーム度 t 値=0.168 有意確率=0.168、男の名前だけのキラ
 キラネーム度 t 値=0.117 有意確率=0.338、女の名前だけのキラキラネーム度 t 値=0.155
 有意確率=0.203)。合意制家族得点が高い人は、キラキラネームをつける人が多いと解釈
 できる(男女の名前を含めたキラキラネーム度 t 値=-0.188 有意確率=0.122、男の名前だけ
 のキラキラネーム度 t 値=-0.175 有意確率=0.151、女の名前だけのキラキラネーム度 t 値
 =-0.123 有意確率=0.314)。しかし、この独立したサンプルの t 検定の有意確率は、10%を
 超えているため分析結果には、考慮が必要である。次に表 8 の分析結果を散布図にした。

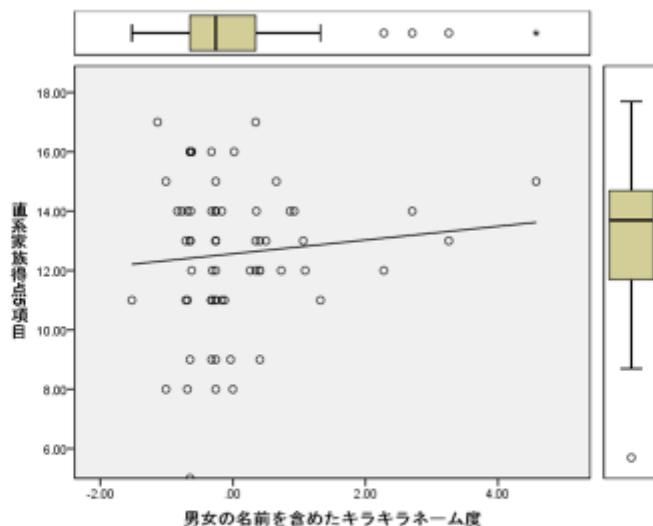


図4.直系家族得点と男女の名前を含めたキラキラネーム度の散布図

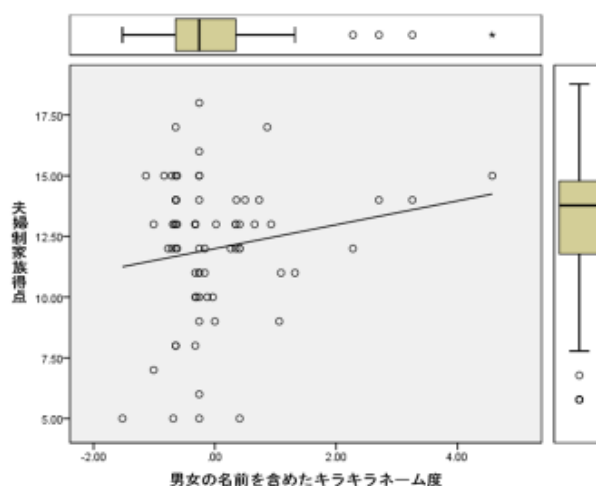


図5.夫婦制家族得点と男女の名前を含めたキラキラネーム度の散布図

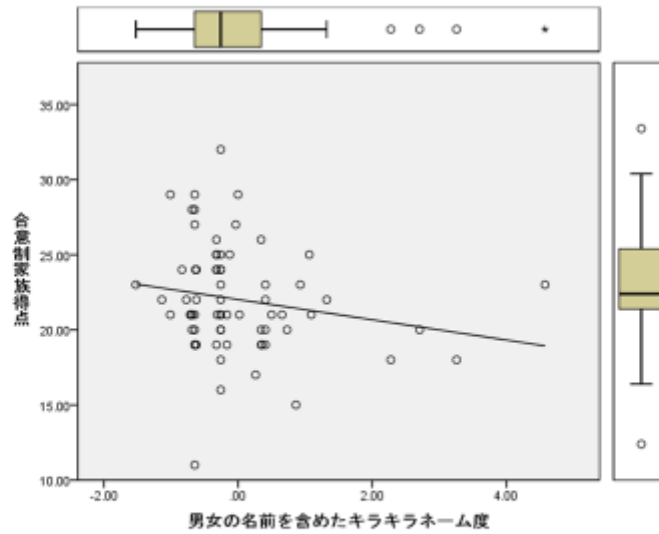


図6.合意制家族得点と男女の名前を含めたキラキラネーム度の散布図

図4、図5、図6は、「直系制家族得点」、「夫婦制家族得点」、「合意制家族得点」と「男女の名前を含めたキラキラネーム度」を散布図にしたものである。この結果から、直系制家族得点が高い人は、普通の名前をつけるひとが多いと解釈できる。夫婦制家族得点が高い人も直系制家族得点と同様、普通の名前をつける人が多いと解釈できる。合意制家族得点が高い人は、キラキラネームをつける人が多いと解釈できる。しかし、有意確率が10%を超えているためこの分析結果には、考慮が必要である。

(4)教育方針との相関

最後に、親の子に対する期待や希望を明確にするために表6の1985年の『社会階層と社会移動調査(SSM調査)』のB票にある「教育するにあたって重要なこと」とキラキラネーム度を独立したサンプルのt検定を行った。ただし、『社会移動調査(SSM調査)』は、様々な階層の人に聞くことが調査目的にあるため、本研究では大学生だけに聞いているため回答に偏りがあった。

	礼儀作法が良い	平均値の標			有意確率(両側)	t値
		平均値	標準偏差	準誤差		
男女の名前を含めたキラキラネーム度	重視しない	0.1206	1.14846	0.18159	0.211	1.262
	重視する	-0.1663	0.73623	0.13671		
男の名前だけのキラキラネーム度	重視しない	0.1815	1.23802	0.19575	0.046	2.046
	重視する	-0.2504	0.42628	0.07916		
女の名前だけキラキラネーム度	重視しない	0.0187	1.08530	0.17160	0.852	0.187
	重視する	-0.0257	0.88700	0.16471		

N=69, **:p<.01, *:p<05

表9.礼儀作法が良いとキラキラネーム度の独立したサンプルのt検定

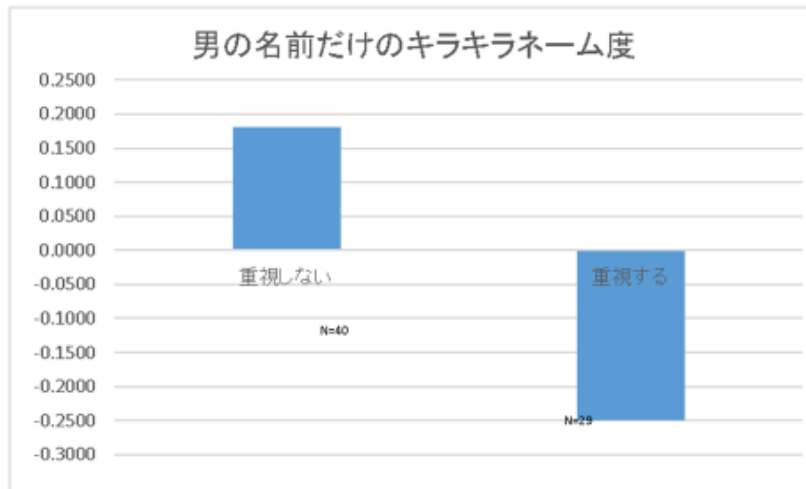


図7.礼儀作法が良いと男の名前だけのキラキラネーム度のグラフ

表9では、表6の「01 礼儀が良いこと」と「男女の名前を含めたキラキラネーム度」と「男の名前だけのキラキラネーム度」と「女の名前だけのキラキラネーム度」を独立したサンプルのt検定を行ったものである。「男女の名前を含めたキラキラネーム度」と「女の名前だけのキラキラネーム度」では、有意確率が10%を超えているため信頼できる結果とはならなかった。「男の名前だけのキラキラネーム度」では、有意確率が0.046なため信頼できるといえる。子どもに礼儀が良い人になって欲しいと願う人は、男の名前だけキラキラネームをつける人が多いと解釈できると解釈できる(t値=2.046 平均値=-0.2504 有意確率=0.046)。そして、図7は、「礼儀が良い」と「男の名前だけのキラキラネーム度」の平均値をグラフ化したものである。このグラフからも重視するが負の値であることから礼儀が良いことを重視する人は、キラキラネームをつける人が多いと解釈できる。

表6の「02 成功しようと努力すること」と「男女の名前を含めたキラキラネーム度」、「男の名前だけのキラキラネーム度」、「女の名前だけのキラキラネーム度」では、相関を見つけることができなかつた。次に表6の「03 正直なこと」と「男女の名前を含めたキラキラネーム度」、「男の名前だけのキラキラネーム度」、「女の名前だけのキラキラネーム度」との相関を以下の図とグラフに示した。

	正直なこと	平均値	標準偏差	平均値の標	有意確率(両側)	t値
				準誤差		
男女の名前を含めたキラキラネーム度	重視しない	0.0873	0.91161	0.13743	0.372	0.903
	重視する	-0.1536	1.14275	0.22855		
男の名前だけのキラキラネーム度	重視しない	0.0384	1.03385	0.15586	0.669	0.43
	重視する	-0.0676	0.95439	0.19088		
女の名前だけキラキラネーム度	重視しない	-0.1763	0.94527	0.14250	0.059	-1.934
	重視する	0.3103	1.03689	0.20738		

N=69, **p<.01, *p<05

表10.正直なものとキラキラネーム度の独立したサンプルのt検定

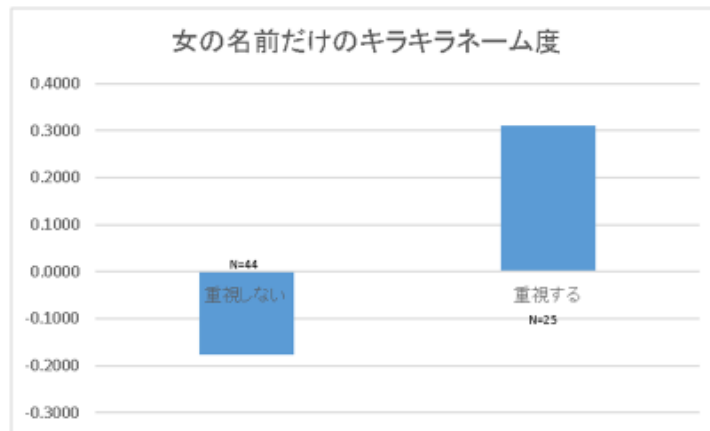


図8.正直なことと女のキラキラネーム度のグラフ

表 10 は、「正直なこと」と「男女の名前を含めたキラキラネーム度」、「男の名前だけのキラキラネーム度」、「女の子の名前だけのキラキラネーム度」を独立したサンプルの t 検定を行った分析結果である。「正直なこと」と「男女の名前を含めたキラキラネーム度」、「男の名前だけのキラキラネーム度」との間には、相関を見つけることができなかった。一方で、「正直なこと」と「女の子の名前だけのキラキラネーム度」には相関を見つけることができた。子どもに正直であって欲しいと願う人は子どもに普通の名前をつける人が多いと解釈できる (t 値=-1.934 平均値=0.3103 有意確率=0.059)。図 8 は、「正直なこと」と「女の子の名前だけのキラキラネーム度」の平均値をグラフ化したものである。表 6 の「04 身だしなみがよく清潔なこと」、「05 良識があり健全な判断ができること」は、「キラキラネーム度」と相関を見つけることができなかった。「06 自制心がある」と「キラキラネーム度」に相関を見つけることができたため、以下に図とグラフを記載する。

	自制心がある	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差		t 値
				標準誤差	有意確率 (両側)	
男女の名前を含めたキラキラネーム度	重視しない	-0.0723	0.85881	0.10735	0.34	-1.077
	重視する	0.9253	2.05659	0.91974		
男の名前だけのキラキラネーム度	重視しない	-0.0425	0.89145	0.11143	0.554	-0.644
	重視する	0.5438	2.02122	0.90392		
女の子の名前だけキラキラネーム度	重視しない	0.0719	0.96873	0.12109	0.099	2.068
	重視する	-0.9204	1.03818	0.46429		

N=69, **:p<.01, *:p<05

表11.自制心があるとキラキラネーム度の独立したサンプルのt検定

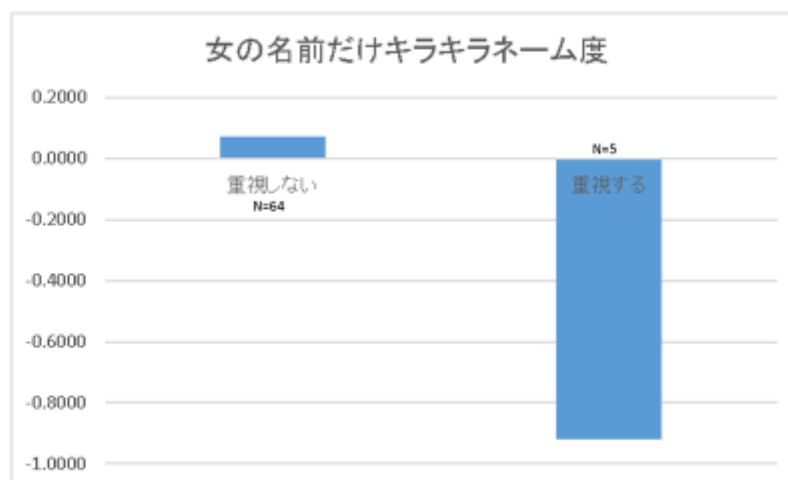


図9. 自制心があることと女の子の名前だけのキラキラネーム度のグラフ

表 11 は、「自制心がある」と「キラキラネーム度」を独立したサンプルの t 検定を行った分析結果である。「自制心がある」と「男女の名前を含めたキラキラネーム度」、「男の名前だけのキラキラネーム度」はどちらも相関を見つけることができなかった。「自制心がある」と「女の子の名前だけのキラキラネーム度」は、相関を見つけることができた。子どもに自制心があって欲しい願う人ほどキラキラネームをつける人が多いと解釈できる (t 値 = 2.068 平均値 = -0.9204 有意確率 = 0.099)。また、図 9 では「自制心がある」と「女の子の名前だけのキラキラネーム度」の平均値をグラフ化したものである。

「07 男らしくまたは女らしくふるまうこと」、「08 他の人と協調できること」、「09 両親のいうことを聞くこと」、「10 責任感のあること」、「11 他人に思いやりのあること」、「12 物事がどのようにそしてなぜ起こるか興味をもつこと」、「13 よい生徒(よい職業人)であること」は、「男女の名前を含めたキラキラネーム度」、「男の名前だけのキラキラネーム度」、「女の子の名前だけのキラキラネーム度」と相関を見つけることができなかった。

4. 考察

前章の結果を 1 つずつ考察していく。まず、表 7 の「キラキラネーム度と実家で祖父母と同居している」の独立したサンプルの t 検定の分析結果から実家で祖父母と住んでいる人は、普通の名前(読みやすい・読みにくい)をつける傾向があると解釈できる。これは、先行研究で述べた「個人化社会」になっているのが原因であると考えられる。なぜなら、「個人化社会」になることで他者と異なっても良く、思うままに幸福や好ましいライフスタイルについての自分たち自身のモデルを選び好みできるようになるからである。またアイデンティティは、「所与」から「課題」に変化することによって、自分が選択できるようになった。これはグローバル化の圧力と個人化の圧力の連携およびそれらが生じさせる緊

張の副次的作用であり副産物である。これによって、「名づけ」の社会的慣習や歴史を継承することが少なくなっている可能性が高いと考える。そのため、名づけの社会的規則を破る「キラキラネーム」をつけていると考える。一方で、家で祖父母と同居している人は、まだ社会的慣習や歴史などを知る祖父母が近くにいることによって、慣習や歴史などが継承できていると考える。そのため、子どもにも社会的規則に則った名づけをする人が多いと解釈できる。

次に、表8の「直系制家族得点」、「夫婦制家族得点」、「合意制家族得点」と各「キラキラネーム度」の独立したサンプルのt検定、図4の「直系制家族得点」と「男女の名前を含めたキラキラネーム度」の散布図、図5の「夫婦制家族得点」と「男女の名前を含めたキラキラネーム度」の散布図、図6の「合意制家族得点」と「男女の名前を含めたキラキラネーム度」の散布図の分析結果から直系制家族得点と夫婦制家族得点が高い人は、普通の名前(読みやすい・読みにくい)をつける傾向があり、合意制家族得点が高い人は、キラキラネーム(読みやすい・読みにくい)をつける傾向があると解釈することができる。つまり、これは家族モデルの違いによって名づけの仕方が違うと解釈できる。この3つの家族モデルの違いを1つずつ考察していく。

まず、自分の家族が直系制家族であると、先ほどの実家で祖父母と同居している人と同様に名づけの社会的規則を守る人が多く、普通の名前をつけると考えられる。次に夫婦制家族得点が高い人が普通の名前をつける傾向がある理由は、時代背景にあると考える。なぜなら、先行研究で野々山が述べたように夫婦制家族になった日本は、「高度工業化の最終段階では、そうした規範性を利用しながら、第2次産業を中心に第3次産業の拡大の中でGDP世界第2位に至り、豊かな生活の実現、すなわち家族生活の向上を達成していった。この産業構造の転換が起こったことにより、日本の工業化は、金融や流通、医療、教育、福祉、情報、スポーツ、レジャーなどのサービス産業の拡大や新たな知識産業化の進展による「脱工業化ないし高度情報化」という新たな段階に入ってきている(野々山、2007)。」このことから家庭より仕事を優先する必要となり、「家庭内のコミュニケーション不足」という欠乏感を感じるようになった。そのことから、夫婦制家族出身の人は、「家庭内のコミュニケーション不足」を自分の子どもには感じて欲しくないという願いを込めていると考える。その結果、個性的な名前というよりも家族のつながりをあらわすために社会的規則を守った名前をつけると考えられる。つまり、夫婦制家族出身者は、「キラキラネーム」をつけるよりも「普通の名前」をつける傾向がある。

また、合意制家族出身の人は、キラキラネームをつける傾向が強いと分析した。これは、ライフスタイルにおける変化や経済的自立の可能性を通して、それまで家族システムに端から拘束されていたライフスタイルから自由になり、自らのライフコースを選択できる可能性がでてきたことで個人化社会になっていることが原因であると考えられる。現代が個人化社会になっていることで子どもには個性的で特別な存在になって欲しいと願う人が多いため日常ではあまり使わない漢字の使用や今まで存在しなかった名前をつけている可能性

が高いと考える。また、合意制家族では、伝統や文化を継承する機会が減り、自主的な選択行動ができることによって、自分の欠乏感や子に対する期待や希望を多様に名づけていることが考えられる。そして、社会的な規則や慣習があっても日本人の人名には読み方に制限が設けられていないため、恣意的な読みができてしまうのも関係していると考えられる。つまり、合意制家族出身者は、誰もが知っているもしくは読める名前よりも個性的で唯一無二の名前をつけると考えられる。ただし、これら3つの家族モデルに対する分析結果は、有意確率が10%を超えているため考慮が必要である。

最後に親の子に対する期待や希望を考察する。これを分析したものは、表9の「礼儀作法がよいことと各キラキラネーム度の独立したサンプルのt検定」と表10の「正直なことと各キラキラネーム度の独立したサンプルのt検定」、表11の「自制心があると各キラキラネーム度の独立したサンプルのt検定」である。有意確率10%未満であったものは、図7の「礼儀作法がよいことと男の名前だけのキラキラネーム度の平均値のグラフ」と、図8の「正直なことと女の名前だけのキラキラネーム度の平均値のグラフ」、図9の「自制心があると女の名前だけのキラキラネーム度」で示した3つである。表6で示した「02 成功しようと努力すること」、「04 身だしなみがよく清潔であること」、「05 良識があり健全な判断ができること」、「07 男らしくまたは女らしくふるまうこと」、「08 他の人と協調できること」、「09 両親のいうことをよく聞くこと」、「10 責任感のあること」、「11 他人に思いやりがあること」、「12 ものごとがどのようにそしてなぜ起こるかに興味をもつこと」、「13 よい生徒(よい職業人)であること」は各キラキラネーム度と相関を見つけることができなかった。図7では、礼儀作法がよいことを重要と思う人は、男の名前でキラキラネームをつけると解釈できる。図8では、正直なことを重要であると考え人は、女の名前で普通の名前をつけると解釈できる。図9では、自制心があることが重要であると考え人は、女の名前でキラキラネームをつけると解釈できる。これらの分析結果は、SSM調査から引用していることから同じ社会階層の大学生を調査対象にしているため子に対して同じ期待や希望をもっている人が多いと考えられる。しかし、13の特質のうち10の特質で相関が見られないことや有意確率であっても男女の名前を含めたキラキラネーム度では相関が見られないことから親の子に対する期待や希望は多様化しているため13の特質では足りないと考えられる。また、現代社会において人の欠乏感というのは人それぞれ違う不安を持っていると考えられる。つまり、事物が複雑多様となった現代社会は人によって欠乏感は様々な理由があり、それを子に対する希望や期待に変えて名づけを行うため名前が多様化していると考えられる。

5. 結論

最後に、本稿で明らかになったことをまとめ、本研究の課題と今後について述べる。まず、祖父母と同居していることによって普通の名前をつけることがわかった。つまり、名づけにおいて社会的規則を守る部分や倫理的な意味や徳目的な概念、あるいは伝統的な美

感を親の願いや期待を込めて表現される日本人の伝統や文化を継承している。一方で、祖父母と同居することが今日では減少していることから社会的規則を守ることや倫理的な意味や徳目的な概念、あるいは伝統的な美感を親の願いや期待を込めて表現される日本人の伝統や文化を継承されることは難しくなる可能性が高いと考えられる。

次に3つの家族モデル「直系制家族」「夫婦制家族」「合意制家族」では、名づけの違いがあると分かった。「直系制家族」では、普通の名前をつける傾向があり、社会的規則を守ることや倫理的な意味や徳目的な概念、あるいは伝統的な美感を親の願いや期待を込めて表現される日本人の伝統や文化を継承していることがわかる。これは、祖父母と同居していることと同様であるとわかった。「夫婦制家族」では、普通の名前をつける傾向が強いと分かった。これは、豊かな生活の実現、生活の向上を目指すことによって日本中が仕事人間になってお金や地位に人生の比重が置かれるようになった。このことによって、「家庭内でのコミュニケーション不足」が共通の欠乏感であった。つまり、この「家庭内でのコミュニケーション不足」の欠乏感を子に対する希望や期待に変えて名づけることは、個性的な名前よりも家族のつながりをあらわすなどの普通の名前をつけると考えられる。

「合意制家族」では、「直系制家族」「夫婦制家族」と違い、キラキラネームをつける傾向が強いと分かった。ライフスタイルにおける変化や経済的自立の可能性を通して、自らのライフコースを選択できる可能性がでてきたことで個人化社会になっていることが原因であると考えられる。現代が個人化社会になっていることで子どもには個性的で特別な存在になって欲しいと願う人が多いため日常ではあまり使わない漢字の使用や今まで存在しなかった名前をつけている可能性が高いと考える。また、社会的な規則や慣習があっても自主的な選択行動ができるため日本人の人名には読み方に制限が設けられていないことも相まって恣意的な読みができてしまうのも関係していると考えられる。

最後に親の子に対する期待や希望は、事物が複雑多様となった現代社会は人によって欠乏感には様々な理由があり、それを子に対する希望や期待に変えて名づけを行うため名前が多様化していると分かった。

最後に本研究の今後の課題について述べる。親の子に対する期待や希望を明確化することを述べた。しかし、親の子に対する期待や希望は、質問項目の13の特質では足りなかったことや様々な社会階層に聞いていないため明確にどのような期待や希望があるかは分からなかった。そのことから、質問項目を自由項目に変えるや違う社会階層の人などに調査することなど質的な研究を含めて更なる検討が必要である。また、分析結果が有意確率10%を超えるものが多かったことは、質問項目の変更など考慮の余地がある。

今回、名づけに関するキラキラネームについて研究する際に3つの家族モデルについて取り上げた。その結果、新たな知見が生まれたが、この傾向が実際に3つの家族モデルの人が子どもに名づけを行う際に適用されるかは検討が必要な点である。また、本研究では、親の欠乏感によって親の子に対する期待や希望にして名づけると検討したが、これから将来時代が変化していくとどのような欠乏感が名づけに影響するかを検討が必要であ

り、今キラキラネームと呼ばれる名前は、どのような変化をしていくか研究していきたい。

6. 参考文献

野々山久也, 2007, 「現代家族のパラダイム革新——直系家族制・夫婦制家族から合意制家族へ」『東京大学出版会』.

ウンサーシュッツ・ジャンカーラ, 2016, 「現代日本における名付け事情とその変遷——男性名と女性名の変化に着目して」『立正大学心理学研究所紀要』.

岡野富美代, 2012, 「名前から見る世相：近代 100 年における変遷」『天理大学考古学民族学研究室紀要』.

佐藤稔, 2007, 「読みにくい名前はなぜ増えたか」吉川弘文館.

エマニュエル・トッド, 2016, 『グローバリズム以後——アメリカ帝国の失墜と日本の運命』朝日新書.

倉石あつ子, 2000, 『人生儀礼事典』小学館.

田中宣一, 2001, 「「名付け」と「名のり」——命名研究の一視点」『日本常民文化紀要』.

牧野恭仁雄, 2012, 「子供の名前が危ない」ベストセラーズ.

URL

明治安田生命, 2016, 「明治安田生命|名前ランキング」

(<http://www.meijiyasuda.co.jp/enjoy/ranking/>, 2017.2.16)

赤ちゃん本舗, 2017, 「命名・お名前ランキング」

(<http://www.akachan.jp/maternity/ranking/>, 2017.5.10)

株式会社リクスタ, 2017, 「赤ちゃん名づけ」

(<https://namae-yurai.net/>, 2017.5.10)